江戸時代前における矢作川の渡河地点

山田　富久[1]・中根　洋治[2]・奥田　昌男[3]・吉田　光[4]・可児　幸彦[5]

[1]正会員　濃尾・各務原地名文化研究会（〒460-0012 名古屋市中区千代田5-7-15　アーバニア千代田409号）
E-mail: yamada.tomihisa@sea.plala.or.jp

[2]豊田中日文化センター（〒444-2149 岡崎市細川町字長根17-5）
E-mail: nakane.youji0814@gmail.com

[3]奥田建設（〒458-0002 名古屋市緑区小坂2-325）
E-mail: simple@star.ocn.ne.jp

[4]正会員　株式会社大建設計（〒461-0001 名古屋市東区泉2-27-14　東海関電ビルディング6階）
E-mail: hikaru.yoshida0831@gmail.com

[5]正会員　濃尾・各務原地名文化研究会（〒509-0145 岐阜県各務原市鵜沼朝日町2-213）
E-mail: y6kani15@hb.tp1.jp

江戸時代，矢作川に橋が架かっていた．江戸時代より前の時代に，矢作川に橋があったとの記録があるが，その真偽や橋の位置についてはあまり論じられていない．

本稿では，矢作川に現存する木杭の発見と観察により，それが橋脚用の杭であることを明らかにした．またそれがいつの時代かについて，杭の配置や大きさおよび渡河地点の歴史的変遷との関連から考察した．

矢作橋の北にある橋脚杭は，近世東海道の道筋から北へかなり離れており，他の古道とも接続してない．矢作川の築堤の歴史と杭の配置の方向から，江戸時代より前の杭であると考える．

矢作橋の南にある橋脚杭は，近世東海道より古い道筋にある．古道の歴史および杭の配置・大きさの検討により，16世紀頃と思われる．

Key Words : *Yahagi-River, crossing point, bridge, bridge pier, Edo-era*

1.　はじめに

愛知県岡崎市にある矢作橋は，木曽山脈南端を発して愛知県の三河地方を流れる矢作川を，国道1号が渡る地点にある．橋の近辺に複数の木の杭があることを，著者の一人である中根は十数年前から気づいていた．

1999年（平成11）矢作川の天神橋近くの河床にある埋没林や木の根を中根が見つけ，その後このことが新聞報道された．これが契機となり，学術調査により「矢作川河床埋没林」が縄文時代のものであることが判明した．

この経験と木杭についてのこれまでの観察・撮影をもとに，木杭が水没する前の 2020年（令和2）6月に，寸法測定などの現地調査した．

調査結果から，木杭が橋脚用の杭であると判明したのでここに報告し，併せて橋が造られた時代について考察する．

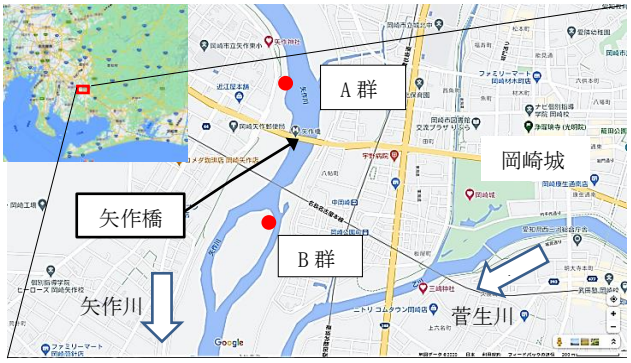
2.　河床にある木杭について

(1)　現況

a)　木杭の所在地

現在の矢作橋は，2011年（平成23）の架け替えである．矢作橋の北約 300m の右岸近くの川床に，4本の木の杭がある（図−1）．以下，A群と呼ぶ．

矢作橋の南約 400m の左岸近くの川床に，2本の木の杭がある（図−1）．以下，B群と呼ぶ．



図−1　杭の所在地（グーグルマップに加筆）

b)　A群の配置と大きさ

A群の配置は図-2，杭の大きさは表-1 の通りである．河岸に近いが，低水位の時は河原であり，増水すると水没する．**写真-1・2**の河原状態が今回で，**写真-3・4**の川の中にあるのが2017年（平成29）に観察した杭の状態である．低水位時には屈曲した流れになっているが，水位が上がるとほぼ南に流れる．以下の杭の写真は，2020年6月9日・24日の撮影である．それ以外は撮影日を記した．

現在の地上露出部は，高さ約 0～15cm で腐食が進んでいる．河岸に近いA-3・A-4の頂部には，別種の植物が生え成長している（**写真-5，6**）．約 20cm ほど掘り下げて観察すると，形状はほぼ楕円柱状である．

A-1（**写真-7**）の枝の切り口を見ると，下向きである．これは天地を逆さにして土中に打ち込んだことを示している．枝の切り口は，他の杭では確認できなかった．橋脚杭は，末口（梢側）を下に打ち込む．杭が入りやすいように先端を削って尖らせ，また震込み作業の重しを載せるためには杭の上部の断面積が大きくなければならない．

A-2（**写真-8**）は，川側（東）の横に縦 15cm・横 12cm・奥行 10～20cm の人手による穴があるが，貫通していない．

杭の配置は，A-2～A-4の3本が，ほぼ一直線であり，人工的に意図した並びである．杭の配置の方向は，南へ流れる矢作川に対して，直角より東が南へ約 26度傾いている．

A群は宝珠院という字名の地先にある．寺の柱間は通常 3m 以内であるので，6.5m 以上の間隔がある A群は，寺院の柱ではないと思われる．

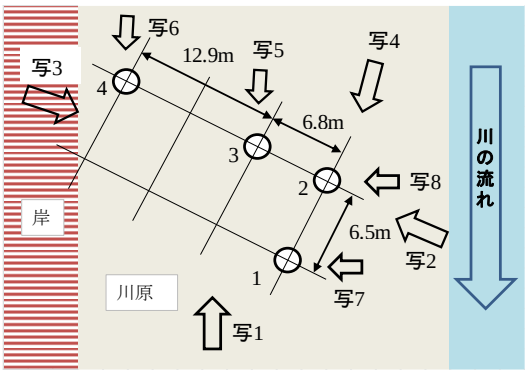


図-2　A群の配置

表-1　A群の大きさ

	長径	短径	高さ ＊
A-1	65	50	15
A-2	60	50	15
A-3	60	55	15
A-4	50	35	0

（注）・単位：cm
・形状：円柱状（楕円）
＊高さ：目測

写真-1　A群の位置（矢作橋から北を遠望）

写真-2　A群の配置（東から西岸を望む）

写真-3　A群の配置（西から東岸を望む，2017年1月23日撮影）

写真-4　A-1,2,3（手前：3，奥右：1，奥左：2，青：下流の矢作橋，2017年7月8日撮影）

写真-5　A-3（上流側）

写真-6　A-4（上流側）

写真-7　A-1（横，東側）

写真-8　A-2（横，東側）

c)　B 群の配置と大きさ

2017年の観察時 5本あった杭のうち 3本が流失し，今回確認できたのは 2本である．B群の配置は**図-3**，杭の大きさは**表-2** の通りである．

B群は，水位に関わらず常時水に浸されている．高さ120～130cm のうち水深部分は約 30cm である（**写真-9**）．

B-1とB-2の頂部には別の木が生えている．形状はほぼ直円柱状である．B-1は上部に行くほど細いが，腐食のためか，元々細いのかは分からない（**写真-10**）．B-2の頂部は，そこに生えた木の根により裂けて広がっている．B-2は上部ほど太いが，木の根によるものか，元々太かったのかは分からない（**写真-11**）．

枝の切り口は見つからず，杭の下部が末口か否かは確認できなかった．

杭は，草木が茂る小さな中洲をはさむ形になるため，見通しがきかず観察や測定がしづらい．杭間の距離は約14.1m，杭の配置の方向は，矢作川に対して，直角より東が南へ約 12度傾いている．

2017年に観察した 5本の杭は，ほぼ一直線の配置であった．

(2)　木杭の評価

以上の点から，A群およびB群の木杭はすべて，橋脚用の杭であると判断する．

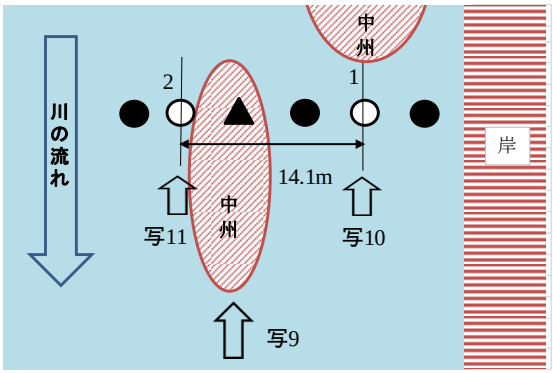


図-3　B群の配置（○：現存，●：2019年にあったが流失，▲：想定される杭）

表-2　B群の大きさ

	直径 ＊（下部）	高さ	周囲（下部）
B-1	35	130	110
B-2	32	120	100

（注）・単位：cm
・形状：円柱状（真円に近い）
＊直径：周囲を測定し，直径を算出

写真-9　B群の位置（下流から上流を望む，B-1：右○，B-2：左○．樹木で見えない）

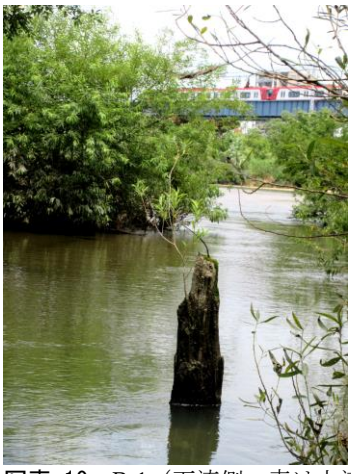


写真-10　B-1（下流側，青は上流の名鉄矢作川橋梁）

写真-11　B-2（下流側）

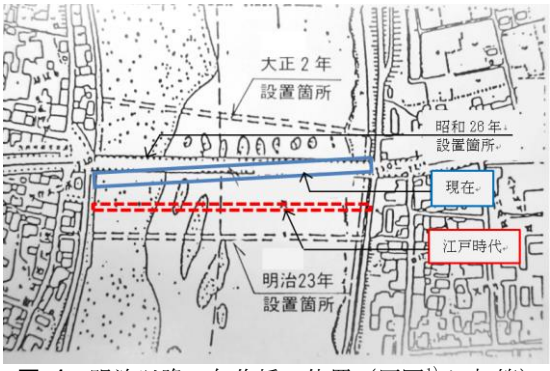


図-4　明治以降の矢作橋の位置（原図[1]に加筆）

3.　矢作橋と古道の歴史

(1)　矢作橋の歴史

江戸時代より前の時代に矢作橋があったとする紀行文などの記録があるが，合戦用の臨時の舟橋ではなく日常的に使用可能な橋が架かっていたかどうか，さらに橋の位置について，確かなことは分からない．

秀吉の家臣である田中吉政が1598年（慶長3）に着工した矢作橋（渡の位置か）は，家康配下の本田康重治世下の1601年（慶長6）頃に，75間の土橋として完成した．1623年（元和9）に家光の将軍宣下の上洛のため土橋の架け替えがあった．1634年（寛永11）には家光上洛のため，208 間の木橋に架け替えられた．以後「東海道一の橋」と呼ばれ，長さ200 間と称されたが，実際は1674年（延宝2）の架け替え以降は 165 間であった．

江戸時代の木橋は 9回の架け直しがあった．最後の橋は，1841年（天保12）に架け替えられたが，1855年（安政2）の洪水により橋は流失した．その後，橋がないまま明治維新となる．幕末，家茂の上洛時は渡船で，明治改元直後の天皇の東京への往復は舟橋を使った．

1871年（明治4）に仮橋ができ，1878年（明治11）に長さ50間，幅3間の木橋が架けられ，1890年（明治23）に架け替えられた．1913年（大正2）に初の鉄橋となり，1951年（昭和26），2011年（平成23）に架け替えをして，現在に至る．明治以降の橋の位置は，**図-4** のとおりである[1]．

江戸時代の歴代の橋は，東海道と接続していたので同じ位置にあったと考えられる．2007年（平成19）頃，矢作橋の下流（数十m）に現れた橋脚杭は，目測で，直径約 30cm，約 6m 間隔であったが，その後流失したため今はない．江戸時代初期の橋かと思われる．

(2)　江戸時代前の古道について

古代の官道である東海道に，矢作橋の西，約 3km の岡崎市宇頭（うとう）辺りに鳥捕（わしとり）駅があった（**図-5**，以下参照）．東南にある次の山綱駅へ行くための矢作川渡河地点はわかっていないが，矢作橋上流の北野～大門（だいもん）だと考えられている．矢作橋の北，約 3.5km の北野に，7世紀後半に建てられた北野廃寺は平安後期に焼亡したようであるが，この道は中世でも使われ続けた．

中世の道は不明な点が多く諸説あるが，道は一つではなく，上ノ瀬が北野～大門，中ノ瀬が矢作～八町，下の瀬が渡～六名・上和田とする説が有力である．

1397年（応永4）頃に，菅生川の付け替えあった．菅生川は明大寺の西を南流していたが，南北に繋がる洪積台地を切り開いて西流化された．六名（むつな）堤を築いたのは，承久の乱（1221年，承久3）の功績により三河守護となった足利氏であると推測されている[2]．

永享年間（1429‐41年），西郷稠頼（つぐより）

の拠点は明大寺の平岩城であったが，享徳年間（1452‐55）に竜頭山（現在の岡崎城の位置）に砦を作った．1531年（享禄4）に松平清康が本拠地を明大寺から竜頭山に移してからは，菅生川北岸が徐々に発展していく．1542年（天文11）と 1548年（天文17），織田信秀と今川義元・松平弘忠連合軍との二度の合戦があった小豆坂は明大寺側で，矢作橋の東南 約 5km にある．

田中吉政が矢作川に堤を造り，総堀による城下町の基礎を築いた．1598年（慶長3）西からの入口にあたる矢作橋架設に着手し．明大寺側にあった古東海道を北岸の城下町に引き入れた，

1601年（慶長6）に本田康重が岡崎領主となり，城下町造りをさらに進めた．矢作橋が1601年頃に完成し，近世東海道が開通する．

その後，大林寺の南に大きな堀を作ったため，1609年（慶長14）以降，東海道は寺の北側を迂回するよう道筋を変更された（**図-6**）．

4. 杭の時代考察

(1) A群について

a) 杭の位置と古道・矢作川の築堤

A群は東海道と接続する江戸時代の架橋地点から北に約 400m 離れているので，江戸時代のものではない．古道との関連は希薄であり，古道との接続から時代を特定することはできない．

A群のすぐ上流では井戸跡が見つかっており，約600m 下流の名鉄矢作川橋梁中央部辺りで，14基の石塔が見つかっている．中世の人家や寺が，現在の河床にあったことは，矢作川の流れが当時と今では大きく変わったことを示している．

図-5 矢作川の周辺図（原図 [3] に着色）

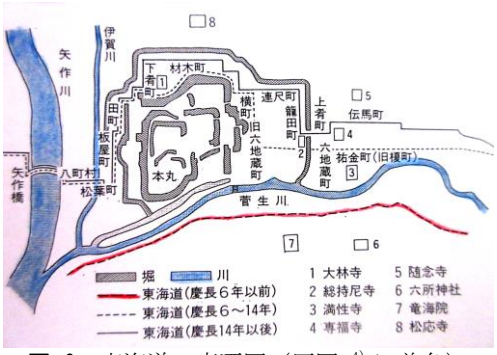


図-6 東海道の変遷図（原図 [4] に着色）

15世紀中頃の享徳年間，西郷稠頼は竜頭山に砦を作ると同時に，矢作川の築堤をしたと伝えられている．最終的には，1600年頃の田中吉政による堤防工事により，分流していた矢作川が一本化され，ほぼ現在に近い川筋になった．

杭の配置の方向が，現在の矢作川の流れで説明がつかないのは当然のことであり，築堤前の矢作川の流れに対して直角に配置したと思われる．

古道との関連は希薄であり，古道との接続から時代を特定することはできない．

A群の杭の時代は，15～16世紀以前と想定される．

b) 杭の太さや配置

ここでは，杭の大きさが分かる江戸時代後半の杭との比較を行う．

1838-39年（天保9-10）の矢作橋架け替えの作事奉行である梶野良材が残した『三州矢立筆記』[5]（以下，筆記）によると，杭の太さは「橋杭は根廻り六尺あまり，末口一尺六寸の槻なり」とある．A群の杭の大きは，A-4の 35cm を除けば 50-60cm（1.7－2.0尺）であり，腐朽していることを考慮すると，『筆記』の 1尺6寸よりかなり大きめである．

1798年（寛政10）の架け替えを記録する『東海道宿村大概帳』[6]（以下，大概帳）では，橋の長さが156間で，橋杭が 52組とあるので，スパンは平均 3間（5.4m）である．

大概帳は，寛政期（1789-1801）に調査をし，1806年（文化3）に完成したが，作り直しのため1843年（天保14）前後の宿内人口が貴重されている記録である [7]．矢作橋でみると，『大概帳』は，『筆記』より一世代前の寛政期の橋を記録し，天保期の橋について追記や補正がないので，天保期は寛政期と変わらなかったと解釈できる．

A群の杭の間隔は，6.8m（3.8間）と 6.45m（12.9m / 2，3.6間）であり，寛政期の 5.2m（2.9間）よりかなり広い．延宝期は 7.7m（4.2間）と広く，A群に適合しない．スパンについては，桁材の調達の影響を受けることも考えられるので，時代判定には慎重を要する（**図-7**，**表-3**）．

『大概帳』によると，矢作橋の杭は 3本立で，橋幅は 4間とある．『筆記』では 4間2尺と記す．橋幅を 7.2～7.6m である．A-1とA-2の間は 6.8m であるので，3本立であると仮定すればその間に 1本あったと想定される（**図-7**）．

A群の大きさや並びは，寛政期や天保期より大ぶりであり，いつの時代か判断できない．

(2) B群について

a) 杭の位置と古道

中世には，現在の岡崎市周辺には多くの道があり，したがって矢作川渡河地点も複数あった（**図-8**）．徒渡りまたは渡船だと思われる．

先に述べたが，16世紀前半に松平氏の居城が明大寺側から竜頭山側に移動したが，まだ城下町は形成されていないので，交通の中心は明大寺側であり，桜街道（古東海道または中世の東海道．以下，桜街道と呼ぶ）だった．

桜街道の道筋について詳しくは分かっておらず，諸説ある．新編岡崎市史 [9] では，東からの道筋を，本宿－岡－生田－大西－明大寺とし，矢作川を六名で渡るとしている（**図-8**）．

田辺堅三郎は，桜街道を「旧東海道」と呼び，明大寺側の三嶋神社（岡崎市上六名町字三島）の境内を通っていたとして，その道筋を推定した [10]．神社の北側の川端には，1929年（昭和4）に明神橋が架けられるまで「明神の渡し」があったとしながらも，矢作川の渡河地点は，神社の南にある六名町字今御堂としている（**図-9**）．

両説に共通するのは，三島から六名に到り，六名～渡で矢作川を渡るとする点である．下の瀬にあたるこの道筋は，鎌倉街道とも呼ばれる．

当然この道はあったが，筆者はこれとは異なる道もあったと考える．特に16世紀頃を想定すると，明大寺から三島まで来て菅生川を渡り八町に到るか，または明大寺辺りで菅生川を渡り，西へ進み八町に到る道である．いずれも八町～矢作で矢作川を渡る．

矢作町出身の石田茂作が，中世を想定したと思われる図で，この道筋を描いている（**図-10**）．武田勇は，菅生川北岸の道を西進する「新桜街道」を提示している（**図-11**）．武田は菅生川の渡河地点を明記していないが，明大寺辺りを想定しているようである．

右岸の矢作町には，名鉄矢作川橋梁の南に現在でも「桜街道」の字名が残っており，また近くの八剣社あたりに遊廓があったとの地元の言い伝えも残っている．

古道との関連から見て，B群は桜街道と接続する地点であると考える．

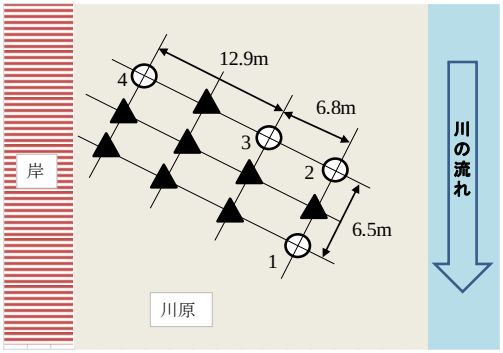


図-7　A群の想定配置（○：現存，▲：三本立の場合に想定される杭の配置）

表-3　江戸時代の橋・杭の大きさ

		和暦	延宝1-2	寛政10	天保10-11
		西暦	1673-74	1798	1838-39
		出典	岡崎市史　8）	大概帳　6）	筆記　5）
橋	長さ	間	156	156	156
	幅	間	4	4	4.2
		m	7.3	7.3	7.6
杭		本立	2	3	(3)
		組	36	52	(52)
橋のスパン		間	4.2	2.9	(2.9)
		m	7.7	5.4	(5.4)
杭径	根周り	尺	―	―	1.9
		cm	―	―	57.9
	末口	尺	―	―	1.6
		cm	―	―	48.5

・数値は，少数点第一位で四捨五入
・スパン＝橋長 ／（杭の組数 ＋1）
・『筆記』には天保期の杭（何本立・何組）の記述がない．『大概帳』の寛政期と同じだとした
・『筆記』の杭径（根周り）は 6尺とあるので，計算により直径 1.9尺とした

b)　杭の太さや配置

杭の太さは，32cm・35cmで，『筆記』より細い．

2019年（令和1）の観察では，5本あった杭の間隔を測定していないが，杭の並びから考えると，中州の位置に杭が1本あったと想定できる．B-1とB-2の間に 2本の杭があるとして計算すると，スパンは4.7m（14.1m / 3）である．2.6 間と狭い．

B群の杭の太さや並びからは，橋の時代は特定できなかったが，A群で述べた江戸時代後期のものより，全体として小ぶりである．江戸時代より前の時代または江戸時代前期の橋脚杭であると思われる．

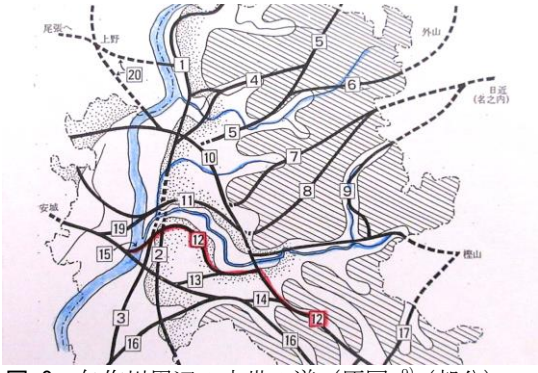


図-8　矢作川周辺の中世の道（原図 [9]（部分）に着色，赤12が桜街道）

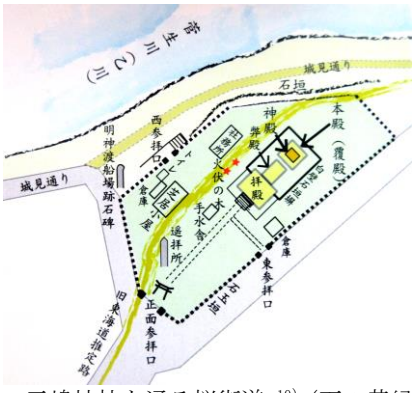


図-9　三嶋神社を通る桜街道 [10]（下の黄緑線）

図-10　浄瑠璃姫古跡巡礼図会 [11]

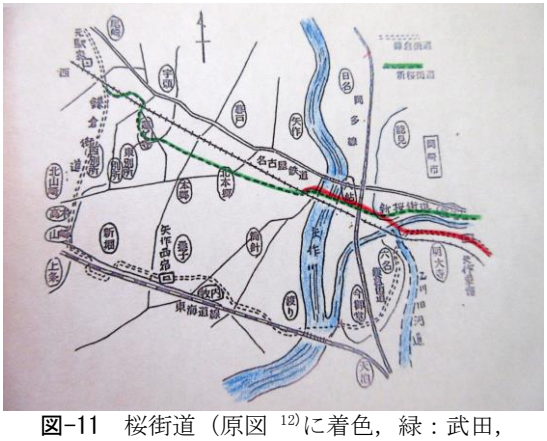


図-11　桜街道（原図 [12]に着色，緑：武田，赤：筆者）

3)　矢作神社所蔵の杭との比較

矢作橋近くには，矢作川右岸の土手下に矢作神社がある．地元民の依頼により，ヤマトタケルが矢で賊退治をしたため，矢を矧（は）ぐが「矢矧」の由来となったと伝わる．矢作橋の設計図額，震込（ゆりこ）みの図額，完成祈願と思われる額などを所蔵している．

同社入り口にある八幡社の所蔵品に，実物の木杭がある（**図-12**）．時代は，江戸～明治時代と思われる．右の杭は，「径一尺六寸，長四尺三寸」（48.5×130.3cm）の縦材とある [13]．先端が尖り，十角形である．円錐状の鉄帽を先端にかぶせて取り付けたときの釘穴が残るとの解説がある．

この杭の太さは，『筆記』の一尺六寸と同一である．

A・B群は立杭の状態であるため，先端の観察ができない．矢作橋は震込み工法であることが分かっているので，先端は削って尖った状態で震込まれていると思われる．

十角形に加工されたのは，地中に埋め込まれる部位（根入り）である．A・B群の目視できる部分にこうした形状を整えるための加工跡は見られない．

加工跡が地上に露出していたとしても，腐食が進んでいるため，十角形を見つけるのは困難である．

図-12　矢作橋の杭 [14]

杭の先端部ではないが，A-2 の側面に加工による穴があることを先に指摘した．杭の重量が約 2 トンと推定できるので，杭を移動させるのに使った穴かもしれない．

5.　まとめ

(1)　結論

A群は，古道との接続がなくいつの時代かを判断することができないが，矢作川築堤の歴史や杭の配置方向から，築堤の前，15～16世紀以前と想定される．杭の大きさの点では，江戸時代後期より大ぶりであり，いつの時代かを判断できない．杭が大きいことは15～16世紀との想定と矛盾するが，理由については分からない．

B群は，古道との関連では，江戸時代より前の桜街道と接続するので16世紀頃と思われる．杭の大きさや配置からは，江戸時代後期より小ぶりな点から，江戸時代よりさらに古いか，または江戸時代前期の可能性があると考える．

1600年頃の田中氏の築堤により砂が堆積し，矢作川の河床が高くなっていった．江戸時代後半には，破堤や越水を引き起こすようになる．したがって江戸時代後半の橋脚杭は，地盤への打ち込みが浅く，流失して今では残っていないと考えられる．逆説的であるが，江戸時代前半または江戸時代より古い時代の橋脚杭の方が，地盤への打ち込みが深く，現存している可能性が高いと思われる．

(2)　残された課題

A群とB群に共通する課題としては，他地区を含めた矢作川に残存する杭の探索・測定を継続する．また架橋時期の特定のため，橋の設置者および古道と接続する橋の位置について，検討を進める．

A群固有の課題として，橋の位置が矢作川の流れに対し直角でない点が，解明しきれていない．矢作川の流路の歴史的な変遷，特に西郷氏や田中氏が堤防を整備する前後の流路解明が必要である．さらに共通課題である時代の特定とも関連するが，A群の杭の大きさや配置の理由を解明したい．

また橋の時代を決めるうえで，杭の年代と樹種の特定は有力な根拠となりうる．公的な機関による科学的な測定を期待したい．

参考文献

1) 建設省中部地方建設局名古屋国道工事事務所（編）：名古屋国道工事事務所　三十五年のあゆみ，建設省中部地方建設局名古屋国道工事事務所，p.93，1987.
2) 新編岡崎市史編集委員会（編）：新編岡崎市史，中世 2，新編岡崎市史編さん委員会，pp.390-392，1989.
3) 前掲 2)，p.147.
4) 新編岡崎市史編集委員会（編）：新編岡崎市史，近世，新編岡崎市史編さん委員会，pp.166-168，1992.
5) 愛知県史編さん委員会（編）：三州矢立筆記（西尾市岩瀬文庫所蔵），愛知県史，資料編 18 近世，愛知県，pp.737-741，2003.
6) 児玉幸多（校訂）：東海道宿村大概帳，近世交通史料集，第 4 巻，吉川弘文館，p.690，1970.
7) 杉山正司：『五街道分間延絵図』と『宿村大概帳』の制作，郵政博物館研究紀要，第 6 号，pp.136-149，2015.
8) 岡崎市役所（編）：岡崎市史，第 8 巻，岡崎市，p.410，1930（復刻：名著出版，1972）.
9) 前掲 2)，pp.1072-1079.
10) 田辺堅三郎：三嶋神社－我が町上六名の氏神は歴代岡崎藩主の守護神だった－，自費出版，p.32,34,47，2017.
11) 石田茂作：浄瑠璃姫の古蹟と伝説，至文堂，見返し，1969.
12) 武田勇：三河古道と鎌倉街道，自費出版，p.150，1976.
13) 作史料編纂委員会（編）：岡崎市史　矢作資料編，岡崎市役所，pp.113-114，1961（復刻：国書刊行会，1988）.
14) 前掲 13），図版 92.